

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：34307

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2022

課題番号：21K12844

研究課題名（和文）パーリ語の過去受動分詞の研究

研究課題名（英文）A Study of the Past Passive Participle in Pali

研究代表者

稲葉 維摩（Inaba, Yuima）

京都光華女子大学・付置研究所・研究員

研究者番号：80760008

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、上座部仏教の文献を伝えるパーリ語の過去受動分詞について、従来と異なる視点から研究に取り組んだ。これまで、過去受動分詞は主に現在完了など「完了」の意味に捉えられ、他動詞から作られた場合には、受動の意味を外す見方がされてきた。しかし本研究を通して、過去受動分詞は、先立つ動作の後続時点における結果を表す結果構文として捉えられることがわかった。このことから、受動は先立つ動作の目的語の結果的状态を表すものだ理解できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、これまで注目されてこなかった観点から、パーリ語の過去受動分詞の意味を捉えたことである。過去受動分詞は主に現在完了などの意味に理解され、受動は外される傾向にあった。本研究は、過去受動分詞が先立つ動作の結果を意味しており、受動は先立つ動作の目的語の結果を表していることを示した。新しい見方からパーリ語の文法の一面を捉え直したものであり、他の中期インド諸語の研究にも通じる内容になるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study examined the past passive participle in Pali from a viewpoint different from previous studies. The meaning of the past passive participle has traditionally been described as anterior (also called “perfect”). The passive, which is a part of the name of the participle, has been considered the active meaning. This study showed that the past passive participle is resultative which expresses a resultant state of a participant in a previous action. Therefore the passive occurs when the past passive participle expresses a resultant state of a patient in a previous action.

研究分野：仏教学

キーワード：過去受動分詞 時制 結果構文 態（ヴォイス）

1. 研究開始当初の背景

(1) パーリ語は、サンスクリット語(または古期インド・アーリヤ語)に比べてさまざまな点で言語変化が起きた、中期インド・アーリヤ諸語の1つである。そのため、パーリ語の音韻と形態に関しては、サンスクリット語との比較のもと、詳細な研究の蓄積がある。その反面、個々の文法範疇の意味や使われ方については研究が少なく、それほど注目されてこなかったと言わざるを得ない。しかし、音韻や形態がサンスクリット語と異なるということは、当然ながら、それを使って意味を区別する仕組みも違うことになる。基本的なことだが、この理解にもとづく研究を進めていくことがパーリ語における重要な課題だと言える。

このような状況の中、過去受動分詞は比較的、意味や使われ方が注目されてきた方である。その理由の1つとして、中期インド・アーリヤ諸語では、過去受動分詞が能格構造を取るテンス・アスペクトの形式として展開していくことがあげられる。これは、近代インド・アーリヤ語にも連なる変化と言える。先行研究において、パーリ語の過去受動分詞は、主に現在完了などの完了(anteriorあるいはperfectや動作パーフェクトと呼ばれる)を表すと理解されてきた。過去受動分詞は、他動詞から作られた場合に態(voice)が転換する。文法上区別される名詞の性・数・格が過去受動分詞と被動作主で一致し、動作主は削除されるか、周辺的な格の具格あるいは属格で現れる。このことが受動と言われるのだが、先行研究では能格構造などの点から能動文として捉えようとしてきた。

(2) さきに触れたように、研究代表者は、パーリ語に対して意味や使われ方があまり注目されていないことを問題視している。この意識のもと、動詞に関する自身の研究として、現在形と過去形の意味と使われ方を調べ、その対立関係を示した。その成果の内、とくに本研究に連なるのは、共起する副詞や文脈との関係で発話時との関連性が生じる場合、過去形が完了に解釈されるという点である。言い換えれば、完了は過去形で表すことができる。このことから、態の転換を伴う過去受動分詞点は、完了よりもむしろ、結果構文(resultativeあるいは状態パーフェクトと呼ばれる)に当てはまるのではないかという着想を得た。結果構文とは、先立つ動作によって生じた、後続時点における結果的状态を表すものである。結果構文が他動詞から派生されると、先立つ動作における被動作主を主語として、その結果的状态を表す自動詞文を作る。これは受動における態の転換と同種のものである。結果構文と完了は、意味や態の転換の有無、派生もとの動詞の違いなどで区別される。したがって、結果構文という見方は、過去受動分詞における完了と態の問題をまとめて解決に導くものと考えられた。

2. 研究の目的

従来より議論されてきたのは、過去受動分詞が表すことからの時点と態の転換(すなわち受動)の問題と言える。ことからの時点の方は完了として理解され、受動は外される傾向にあった。対して、本研究は、パーリ語文献における過去受動分詞の使われ方を調べることを通して、これを結果構文の観点から捉えなおすことを目的としている。このことを通して、パーリ語の時制体系の記述に寄与することを目指す。

3. 研究の方法

パーリ語の文献で基本となるのは、ブッダや弟子の言行録である「経」、僧団の規定である「律」、教理を体系化する「論」からなる三蔵文献である。過去受動分詞を研究するにあたって、本研究はこの中の経を対象とした。経は物語の形式になっている。会話が多いため、表現が豊かだと言える。そのため、文法の研究に適していると考えられる。なお、経には論や注釈に当たるものが一部含まれているため、それらは研究範囲としなかった。

具体的な方法として、当初はテキストを読み進める形を想定していたが、分詞ごとに用例を集めるという方法が適切であったため、この仕方でも研究を進めた。パーリ語の動詞は接頭辞によって意味が変わるため、接頭辞の付いた形式もそれぞれ用例を集めて調べるようにした。用例は過去受動分詞の現れる文だけでなく、前後の文脈を含めた、ある程度広い部分を取り出した。前後の文脈が重要な手がかりになるからである。

4. 研究成果

(1) 2021年度は用例の収集を行い、個々の過去受動分詞の使われ方を調べた。研究成果として、本研究の目的に通じる興味深いことがらを見つけることができた。

1つめは、過去受動分詞から受動を外し難いと考えられることである。態の転換した過去受動分詞の文では、動作主を欠く場合が少なくない。そもそも受動は動作主が主要な項でなくなるのだから、動作主が言及されないことは問題ないのだが、過去受動分詞を能動の意味に見ようとする

る場合、このことは問題になる。また、過去受動分詞は、自動詞など動詞によって態の変わらないものがあるのだが、その過去受動分詞が態の転換を起こしている場合があった。これは前後の文脈に出てくる他動詞から派生された過去受動分詞に合わせて、あえて態を変えたと考えられる（具体的には、問題の分詞は移動動詞「行く」から作られたもので、通常は行為主体が主語になるのだが、ここでは到達地点の方が主語になっている）。

2 つめは、動作主を標示するのに使われる属格の傾向である。態の転換した過去受動分詞の文では、動作主に言及する場合、具格か属格が使われる。この内、属格が使われる過去受動分詞には、ある傾向を指摘しうる。結果構文にはいくつかの種類があるのだが、その中、一定の語彙から作られる「所有の結果構文 (possessive resultative)」というものがある。これは、先立つ動作の対象が動作を行う主体の一部であるか、結果的に所有・所属関係になる結果構文である。パーリ語の属格は、所有の結果構文を作りうる語彙の過去受動分詞とともに使われる傾向が見えてきた。

(2) 2022 年度は、研究対象とする文献の範囲を変更し、前年度に得られた成果に基づきながら用例調査を進めた。当初は経に属する文献を研究範囲としていたが、テキストの性質を鑑みて、対象を『ディーガニカーヤ』、『マジマニカーヤ』、『サンユッタニカーヤ』、『アングッタラニカーヤ』に絞った。これらは散文を主として書かれている。経にはこの他に韻文の文献が複数あるのだが、韻文では韻律などの制限やことばの技巧がある。また、文献の成立年代にも差がある。本研究は過去受動分詞の基本的な振る舞いを調べることが目的であるため、韻文特有の制限がない散文を研究対象とする方がよいと判断した。以下、研究期間の最終年度である本年度で得られた成果をまとめる。

パーリ語の過去受動分詞は、もとの動詞が自動詞の場合、先立つ動作における主語の、後続時点での結果的状态を表す結果構文を派生する。他動詞の場合は態が転換し、先立つ動作における被動作主の結果的状态を表す結果構文が作られる。したがって受動は、他動詞から派生した結果構文において、被動作主の結果的状态を表すために生じると理解される。

他動詞から派生された過去受動分詞の動作主を表す属格は、散発的に使われる場合(つまり、調べた文献の範囲で 1 回程度のみ確認される場合)もあるのだが、それを除けば、主に「理解する、聞く、する」などの動詞の過去受動分詞とともに使われる傾向が指摘できる。これらの動詞は、典型的に所有の結果構文を派生しうる語彙に当たる。そのため、この時の属格は動作主でもあるのだが、所有の結果構文においては「所有者」を表していると考えられる。一方、散発的な出現も含めれば、具格と属格の違いは見えにくくなる。5 世紀頃に作られたとされているパーリ語の注釈書を見ると、両者の違いに言及している場合もあれば、属格を具格に言い換えて説明している場合もある。したがって、属格の使われ方が他の文献でどのように変化していくかが、今後の課題の 1 つとなるだろう。

(3) 最後に、今後の展望を述べる。本研究の研究範囲は限られたものであったため、当然ながら他の文献でも過去受動分詞の使われ方が調査されねばならない。その際、本研究の成果は今後の方向性を示すものとして大変有用なものとなる。というのも、結果構文は完了や単純過去などに変化していくからである。したがって、他の文献で過去受動分詞に何らかの違いがある場合、ことばの変化として捉えていくことができる。パーリ語では、成立がより後の文献で、過去受動分詞の使われ方に違いのあることが、先行研究によって指摘されている。さらに視野を広げれば、これはパーリ語に限ったことではなく、テンス・アスペクト体系が変わっていく他の中期インド・アーリヤ諸語にも関わる内容となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 稲葉維摩	4. 巻 116
2. 論文標題 結果構文から見るパーリ語の過去受動分詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『佛教學セミナー』	6. 最初と最後の頁 31-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 稲葉維摩	4. 巻 32
2. 論文標題 所有の結果構文とパーリ語の過去受動分詞	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『真宗文化：真宗文化研究所年報』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 稲葉維摩
2. 発表標題 パーリ語の過去受動分詞と結果構文
3. 学会等名 真宗文化研究所 研究発表例会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------